

☆同志社国際中学校「青木せんせい！」講評（第37回 Kyoto 演劇フェスティバル）

まず、この作品を創作されたことに、拍手を送りたいと思います。

若くて気さくで、生徒よりも「小さな青木ハヤト先生」は皆さんの理想の先生なのでしょう。あさひ村の小さな小学校も理想の学校なのかもしれません。

「こんな先生がいたら面白いなあ」と、皆さんがいろいろな先生像を語り合って、つくりあげてきた様子が目に見えるようです。

劇の始まりは白石のおばさんが掃除をしているところに2人の小学生が登校して来るところからはじまります。いつもは3人で登校するのに1人いない。おばさんは「ルミちゃんは」と聞きます。また青木先生も「ルミのやつ調子がおかしいな」と言いますので、最初はルミはどうしたのか？という謎解きが大きなストーリーなのかなと思って観ていました。しかし、劇が進行していくと、このことには重点を置いていないように見えました。

それよりも面白いシーンを作ることに力を注いでいましたね。朝、学校についてランドセルを逆さにして中身を全部出すシーン、机のところで相手を脅かすシーン、青木先生の背が足りずに椅子の上に立って授業をするシーンなど、動きのあるシーンがたくさんあって、それがとても面白かったです。ここでも演劇部の皆さんが工夫をしたことがよくわかります。

後半は青木先生が何故先生になったのかを描いていて、彼の恋愛騒動が三角関係？なども入り混じり描かれます。

「すみれさんを傷つけることは許さない！」とか「僕には決めた人がいるんだ！」など、青木先生の純な人柄が描かれます。誠実な男性ですね。

転んで泣く子にお花を上げると泣き止む、そしてありがとうと言って笑ってくれた笑顔が忘れられなくて、教師になったと先生が言ったと受け取りましたがそれでよかったですよ。か。

先生だけれども友達のような、時にはクラスの子どもたちに「青木って本当にバカだ！」などと言われながらも、子どもたちと日々格闘して教育をしている純粹で熱い青木先生のような先生に会いたい！という皆さんの思いがいっぱい詰まっていると感じました。

この作品は皆さんの力だけで創りあげたのだろうと思います。今後はそれぞれの登場人物がこの劇の中で何を感じどう動いているのかを、もう少し整理していくと、よりわかり易い作品になると思います。

それから、注意してほしいことがもう一つあります。演劇ではセリフが客席に届かないと意味が伝わりません。日頃から滑舌をよくして言葉が伝わるような訓練をしてくださいね。これからも皆さんの感じていることを「劇」にして観せてください！楽しみにしています。

（講評者 大原 めい）